

# 仮説としての邪馬台国「福岡・朝倉説」

江原 幸雄

## 目 次

1. 「魏志倭人伝」中の邪馬台国の位置に関する各論
  - 1.1 帯方郡から邪馬台国までの距離
  - 1.2 「南の投馬国へは水行 20 日、南の邪馬台国へは水行 10 日陸行 1 月」
  - 1.3 「女王国の東、海を渡ること 1,000 余里、また国があり、みな倭種である」
  - 1.4 「また、侏儒国がその南にある。人の丈 3~4 尺、女王を去ること 4,000 里。また、裸国・黒齒国がその東南にある。船で 1 年がかりで着くことができる」
  - 1.5 福岡・朝倉の地名と奈良・大和の地名との不思議な一致
  
2. 東遷の理由考
  
3. 私（江原）の「東遷説に基づく邪馬台国 福岡・朝倉説」

参考文献

## 1. 魏志倭人伝中の邪馬台国の位置に関する各論

いわゆる「魏志倭人伝」の中には邪馬台国の位置に関する重要な記述がなされ、いろいろな視点から議論されているが、依然統一的な見解が得られていない。以下では、従来必ずしも十分指摘されていない事項、あるいは従来から指摘されてはいるが、必ずしも本質的に重要であるとは指摘されていない事項、さらには、魏志倭人伝に直接記述されているわけではないが、邪馬台国の位置を考える上で重要と考えられる事項について記述したい。

### 1.1 帯方郡から邪馬台国までの距離

魏志倭人伝では、帯方郡を出発し、韓国を経て、対馬海峡を島伝いに船で渡り、末慮国に着き、さらに、陸上を歩き、伊都国を経由して、奴国、さらには不弥国（現在の宇美町付近）に着くとされている。それぞれの区間の距離はいずれも「里」で表現されており、中国の役人は、実際にそれらを訪れるなどして、比較的信頼のおける距離を示していると考えられる。

区間ごとの距離の数値を見ると、帯方郡から狗邪韓国まで 7,000 余里、狗邪韓国から対馬国まで 1,000 余里、対馬国から一支（耆岐）国まで 1,000 余里、一支国から末慮国まで 1,000 余里、末慮国から伊都国まで 500 里、そして、伊都国から奴国まで 100 里、奴国から不弥国まで 100 里とされている。記述された数値は丸められたものであり、7,000, 1,000, 500, 100 となっている。7,000 余里とは 7,000 里から 8,000 里の間、1,000 余里とは 1,000 里と 1,500 里の間、500 里とは 400 里と 600 里の間、100 里というのは 50 里と 150 里の間程度を示すものと考えられる。このように考えると、**帯方郡から不弥国までは、最小 10,500 里、最大 13,400 里程度**になる。一方、帯方郡から邪馬台国までは、12,000 余里とされており、**最小 12,000 里、最大 13,000 里程度**になる。したがって、不弥国から邪馬台国までの距離は、かなり近いと推定され、1,500 里を超えない程度と考えられる。

当時の 1 里は現在のどの程度の距離に相当するかが問題であるが、比定置が比較的信頼できる地点間の距離に基づけばおおよそ 80m 程度である。したがって、邪馬台国の位置は、不弥国から、120km を超えることはないと考えられる。実際は  $60 \pm 60$ km を想定すればよいと思われる。その位置を北部九州内で平地のある地域とすれば、東方であれば現在の福岡県豊前市、南東方向であれば大分県日田市、南方向であれば福岡県大牟田市あたりまでであり、これらと宇美町を結ぶ途中で邪馬台国があるとするのが妥当である。これらの領域で、70,000 戸という家を含むことのできる広大な平野は、現在の福岡県小郡市、朝倉市、久留米市、柳川市、筑後市さらには佐賀県佐賀市を含む地域一帯が想定される。これらの地域の中で、現在に至るまでの中心都市は久留米市であり、邪馬台国は久留米市近辺の筑後平野の一角であろうと推定される。

### 1.2 「南の投馬国へは水行 20 日、南の邪馬台国へは水行 10 日陸行 1 月」

帯方郡から出発し、奴国あるいは不弥国までの距離は「里」で表現され、邪馬台国は久

留米市近辺の筑後平野のどこかではないかと推論される。不弥国からは余り離れていない(1,500里程度以内、すなわち120km程度以内)。もしそうであれば、不弥国の記述に続き、邪馬台国までの距離は、方位とともに「○(方位)行して(魏志倭人伝の以後の記述からすれば「南行して」となるのではないか)邪馬台国まで○○○○里」としてもよさそうである。

しかし、魏志倭人伝ではそうではなく、それ以降は距離の書き方が改まり、「南の投馬国に行くには・・・・、そして、南の邪馬台国に行くには・・・・」となっている。しかも、「水行」が先行している。まず、一つの解釈は、中国の役人は実際には不弥国から陸路で邪馬台国に行っていない(伝聞もない)。もし、実際に行っていたら(あるいは伝聞があれば)、「南行して、邪馬台国まで1,000余里」のように記述したと考えられる。

倭国に來た中国の役人が倭国の最重要国「邪馬台国」に行かなかった理由は何か。まず、末慮国に船で着いて、陸行して邪馬台国に至るには、非常に大変な行程であったことが考えられる。これは、たとえば、末慮国から伊都国へ行く道であっても、「前を行く人が見えないような獣道」であり、弥生時代には、国同士の連絡道路は徒歩ではかなり難儀なものであったのではないか。したがって、中国の役人は、邪馬台国へ行っていないし、陸路で邪馬台国に向かうことは全く想定しなかった。

末慮国から先の遠方の地は、出来る限り、水行が選択され、必要な場合は、それ以降を陸行すると考えられていた。倭国へ來た中国の役人にとっては、職務上、邪馬台国に直接出向く必要はなく、伊都国まで行けば十分であった。伊都国から先は、倭人の役人の役割であった。そのために、伊都国に一大率という対外的出先機関の長が置かれていた。そして、必要性あるいは特別の興味があったごく一部の中国の役人のみが奴国または不弥国まで行くことがあったのではないか(あるいは、倭人からの伝聞)。そのような一見あるいは百聞に基づいて、それぞれの国までの距離や戸数を記述したのであろう。弥生時代には、末慮国から、伊都国、奴国さらには不弥国に陸行するには大変な労力が必要とされた。

そのような状況が、「**南の投馬国へは水行 20 日、南の邪馬台国へは水行 10 日陸行 1 月**」という記述を生み出したのではないか。投馬国まで水行 20 日であるが、水行だけであるから、投馬国は海岸に近い所にある。一方、邪馬台国は、水行後、陸行が追加されており、海岸近くではなく、内陸にある。そして、この陸行 1 月は道路が整備されている現代感覚からすれば非常に長い、国と国との連絡道路は「前を行く人が見えないような獣道」であり、実際の距離はそう長くはない。

さて、投馬国まで水行 20 日、邪馬台国まで水行 10 日となっており、邪馬台国までの水行による距離は投馬国までのおおよそ半分である。そして、水行であるから、起点は港であり、中国の役人が日本に上陸する「末慮国」の港から出発すると考える。すなわち、投馬国、邪馬台国は末慮国の港から水行で南に向かう。水行のルートは二つが考えられる。九州の西側沿岸を進むルート(西ルート)か、東側沿岸を進むルート(東ルート)である。西ルートであれば、末慮国の港を出発し、壱岐水道を通り、五島列島の東沖を通り、天草

灘を経て、薩摩半島方向へ向かう。一方、東ルートであれば、末慮国の港から玄界灘に出て、関門海峡を渡り、豊後水道、そして、日向灘を経て、大隅半島に向かう。薩摩半島あるいは大隅半島を超えてさらに南に進めば、九州本島からは離れてしまい、投馬国あるいは邪馬台国にたどり着くことはできない。すなわち、魏志倭人伝で想定している、末慮国の港から九州の南端までの距離（日数）は高々20日である。海上距離で数100km（600km程度か）離れた地点を20日で行くとすれば、1日の平均航続距離は30km程度となる。これは遅いようにも感じられるが、航行は日中だけであることを考えると、また、不順な天候の日もあるとすれば、必ずしもそうとは言えない。また、距離の記述は20日、10日という丸めた数字であり、一般に誇張して書かれる中国書の記述を考慮すると、実際にはもっと短い可能性がある。なお、この種の不確かな議論を続けることはあまり実りがない。

そこで、別の観点から考える。邪馬台国とともに記されている投馬国とはどんな意識を持って書かれたのであろうか。おそらく、邪馬台国よりも南方遠くにある大きな国であるとの認識ではないか。実際、魏志倭人伝には戸数50,000余戸とされており、魏志倭人伝の中では、邪馬台国に次ぐ大国として記述されている。50,000余戸という数値はともかく、邪馬台国より南の九州島内に大国があったということになる。そして、その国は海岸に面している。弥生時代の九州南部に大国があり、多数の人が住んでいたというのである。

実はこのことを実証的に議論するための重要なデータが存在する。それは、小山・杉藤（1984）による、弥生時代の九州地方の人口密度分布である。それを図1に示した。この図は極めて興味深い。それは弥生時代の九州島における人口集中部は主として2か所あり、一つは、筑後平野から熊本平野を通り、八代平野にかけての有明海東岸地域であり、もう一つは、宮崎県南部の日向灘に面する、現在の日南市、南郷町、そして串間市あたりを含む地域である。この有明海東岸地域と宮崎県南部沿岸地域とが弥生時代の九州島における二大中心地とするならば、邪馬台国は有明海東岸地域にあり、投馬国は宮崎県南部の日向灘に面した地域に相当する。これらの国々に、前述した西ルートあるいは東ルートで向かったのではないか。邪馬台国へは、上陸後陸行の必要がある。それも1カ月という比較的長旅が必要である。これについても、「前に人が見えない様な獣道」を考えると、実際には、それほど長距離と考える必要はない。しかしながら、西ルートを考える場合、有明海東岸から上陸して陸行すると、弥生時代に最も人口密度の大きい地域を横断することになり、陸行1月はやや長い。その場合は、東ルートということになる。東ルートで向かい、別府湾あたりで上陸し、西に向かって、邪馬台国に向かうことが考えられる。別府湾から現在の湯布院町、九重町、日田市を通る山際の低地を進み、朝倉市に向かうルートが想定される。ほぼ現在の国道210号線に沿うルートである。別府湾で上陸して現在の日田市を經由し、邪馬台国が含まれる有明海東岸の内陸部に到達するのに1か月くらいかかると考える。

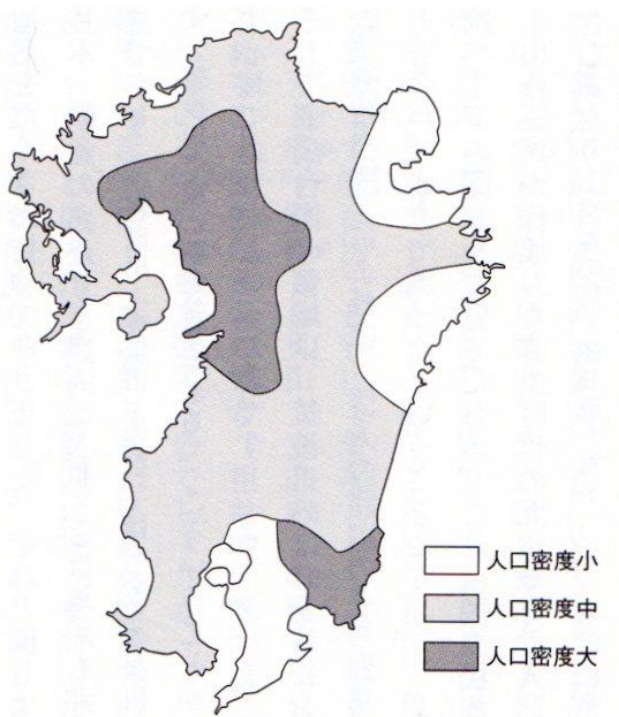


図1 弥生時代の九州の人口密度分布（小山・杉藤、1984）。

しかし、この場合、何故そのような難儀な陸路を選択するのかという単純な疑問が残る。可能性の一つとして、有明湾東海岸から上陸した場合、隣接している狗奴国（邪馬台国と敵対関係にある）の警備兵等から攻撃を受けることが挙げられる。

一方、別府湾で上陸せずに、そのまま南へ進めば、やがて、日向灘南部に達し、現在の日南市近辺に到達する。末慮国の港から別府湾までの距離は末慮国の港から日南市沖までのちょうど半分くらいであり、水行 10 日と水行 20 日に対応している。なお、ここでは、邪馬台国および投馬国に到達する水行のルートとして九州東海岸のルートも想定したが、西ルートも十分あり得る。ただ、魏志倭人伝には、女王国より東に海を挟んで倭人が住んでいると記されており、東方に関する認識もあり、倭人も含めて、東ルートをとる可能性もあるのではないか。

ここで大事なことは、邪馬台国は内陸にあり、投馬国は海岸付近にあり、水行の距離は、邪馬台国までは、投馬国までのルートの半分くらいであることである。そして、末慮国の南方（の九州島内）に、邪馬台国も投馬国もあるということである。

### 問題点 倭国に来た中国の役人が倭国の最重要国「邪馬台国」に行かなかった理由は何か？

その理由として、邪馬台国は倭国の中では、卑弥呼の出身国という以外に特に政治的には、重要性がなかったのではないか。帯方郡の使いは伊都国に留まることになっていた。外交および内政をつかさどっていたのは、伊都国にいる倭国王であった。邪馬台国が倭国

の最重要国であったとすれば、遠いかどうかよりも帯方郡の使いは邪馬台国へ行くのが自然ではないか。すなわち、邪馬台国そのものは倭国の中では政治的には重要性がなかった。単に卑弥呼の出身国であった。卑弥呼は共立されて倭国の王に着いた後、代々、王が住むことになっていた伊都国に移り住んだのではないか。卑弥呼のいなくなった邪馬台国は長官の伊志馬が治めたのではないか。魏志倭人伝には伊都国には代々王がいると記述されているが、他の国についてはそのような記述はない（ただし、長官はいる）。当時の倭国では、倭国を構成する諸国の王が、合議によって倭国王を推挙し、選ばれた王は出身国から離れ、伊都国に住むことになっていたのではないか。卑弥呼はそれに従って、邪馬台国から伊都国へ移り住んだ。そして卑弥呼は伊都国で倭国王の職務を果たし、伊都国で死んだのではないか。墓の候補は、伊都国平原遺跡の女性（王妃）の墓ではないかと推定されている「三雲遺跡群（三つの王墓あり。今後さらに発見される可能性あり）の一つではないか」。この三つのうちの王の甕棺と並んでもう一つの大きな甕棺が見つかった。二つの甕棺は溝で囲まれた区画の中にあり、この甕棺にも 22 面の前漢鏡と玉類があったが武器類はなく、王妃の墓と推定されている。紀元前一世紀（三世紀？）の合葬墓としての王墓である。なお、甕棺が平均より大きいのは、王妃が大柄の女性だったことを示唆しているという（森浩一、倭人伝を読み直す、110 ページ。全 207 ページ、ちくま新書（2010 年））。なお、死後の卑弥呼が邪馬台国と関係はなかったのか。そうではなく、国王としては伊都国平原遺跡に葬られたが、邪馬台国でも葬儀（分骨？）がなされたのではないか。その墓がたとえば、恵蘇八幡宮の円墳である。したがって、卑弥呼は平原遺跡に葬られたが、故郷にも墓が作られたのではないか。

魏志倭人伝には邪馬台国の記述が少ないのは、邪馬台国は、倭国の中では政治的に重要ではなく、首都（伊都国）から離れた普通の一国であることによるのではないか。

### 1.3 「女王国の東、海を渡ること 1,000 余里、また国があり、みな倭種である」

女王国である邪馬台国は九州島の中にあると考えるのが素直な推論である。そして、女王国の東方に海があり、1,000 余里で別の国があるが、それは女王国の人と同じ倭人である。海を渡ること 1,000 余里であるから、水行の距離が 1,000 里から 1,500 里の程度である。現在の距離で言えば、80km から 120km 程度となる。末慮国の港から 80~120km は、現在の地名で言えば下関あたりで、中国地方の入り口を指している。したがって、魏志倭人伝は、ほぼ九州地方を記述していること、および、以下に述べるように、九州島の南方にある国々について特に記述している。もし、邪馬台国が近畿地方にあるとすれば、その南方の国を記述することは理解がしにくい。

### 1.4 「また、侏儒国がその南にある。人の丈 3~4 尺、女王を去ること 4,000 里。また、裸国・黒齒国がその東南にある。船で 1 年かかりで着くことができる」

侏儒国が女王国のあるところから南方 4,000 里にあると書かれている。この場合、邪馬

台国からというより、九州南端から南方向に4,000里程度と解することが妥当である。4,000里といえば、現在の距離で320km程度である。この距離に近い島は奄美大島である。したがって、奄美大島の可能性もあるが、むしろ、歴史的に見ても人口の多かった沖縄本島を想定した方がよい。沖縄本島までは九州南端から500kmを超えるが、当時の距離の認識精度から言えば、十分検討の範囲に入る。特に、そこに住む人々の身長が低いと表現されているが、現在でも沖縄の人々は、日本人の都道府県別平均身長の中では最も低く、都道府県別平成20年度調査時データ（17歳）によると、男性の平均身長は170.7cm、最大値は富山県の171.8cm、最小値は沖縄県の168.9cm、女性の平均身長は158.0cm、最高は神奈川県159.2cm、最小は沖縄県の156.2cmとなっている。地域的な平均身長の差の原因は気候等とされ、日本の最も南方に位置する沖縄県の男性女性とも平均身長が低いことは納得される。食生活を含め、時代が進むにつれ文化が平均化され、平均身長差も減少すると推定され、弥生時代には、現在よりも、平均身長差がもっと大きかったのではないかと推定される。また、実際の身長差はそれ程大きくはないが、そのようなことを特に強調したのではないかと推定される。中国の書物では、物事を過大あるいは過小に記述することは珍しくない。

そして、さらに南東（南西ではないか）方向に、水行で1年もかかるところに、裸国・黒齒国がある。非常に遠方と記述されている距離（水行の日数）がどの程度正確かはわからないが、裸でくらし、歯を黒く染めている人が住む国があると記されている。これは九州よりもかなり南方になる。南方にある大きな島としては台湾とフィリピン・ルソン島が想定されるが、中国の書が、中国大陸近くの台湾と誤認することは考えにくいので、裸国・黒齒国はルソン島ではないか。九州島南端からフィリピン・ルソン島まではおよそ1,500km位である。末慮国の港から九州島南端までの距離はおおよそ300km程度であり、これに要する日数が20日であるから、距離の分だけ伸ばせば、100日程度で着けることになるが、魏志倭人伝ではこれを1年がかりで行くと想定している。1年という数値は実数ではなく、これまでに出てきた各地までの距離に比較して非常に遠いという意味であろう。

### 1.5 福岡・朝倉の地名と奈良・大和の地名との不思議な一致

以上で述べてきたように、魏志倭人伝の示す方位や距離（移動日数）を大きく変えることなく、邪馬台国は九州島内陸部とくに有明海東側の内陸地域にあると考えるのが最も妥当ではないか。基本的には、方位に関しては大きく誤る可能性は少ないが、距離に関しては大きな誤差を含みうる。

そのように考えると、邪馬台国の位置として最も可能性が高い地域は、筑後平野の中央部に位置する、現在の久留米市から朝倉市にかけての地域が想定される。そうであれば、それをよく説明するのではないかとと思われる特異な地理的データが存在する。それは、**福岡・朝倉の地名と奈良・大和の地名との不思議な一致**である。それを示したのが図2である。図中左側は九州北部地方特に福岡県の朝倉市周辺の地名の配置を示したものであり、図中右側は、奈良県の大和郷の周りの地名を示したものである（安本、2012）。両図を比較する

と、説明の必要のないほど多くの似た地名が似た方位で順序良く配列されており、両者が全く偶然にそのような地名配置になったとは考えにくい。むしろ、どちらかがどちらかを模したという方が合理的である。

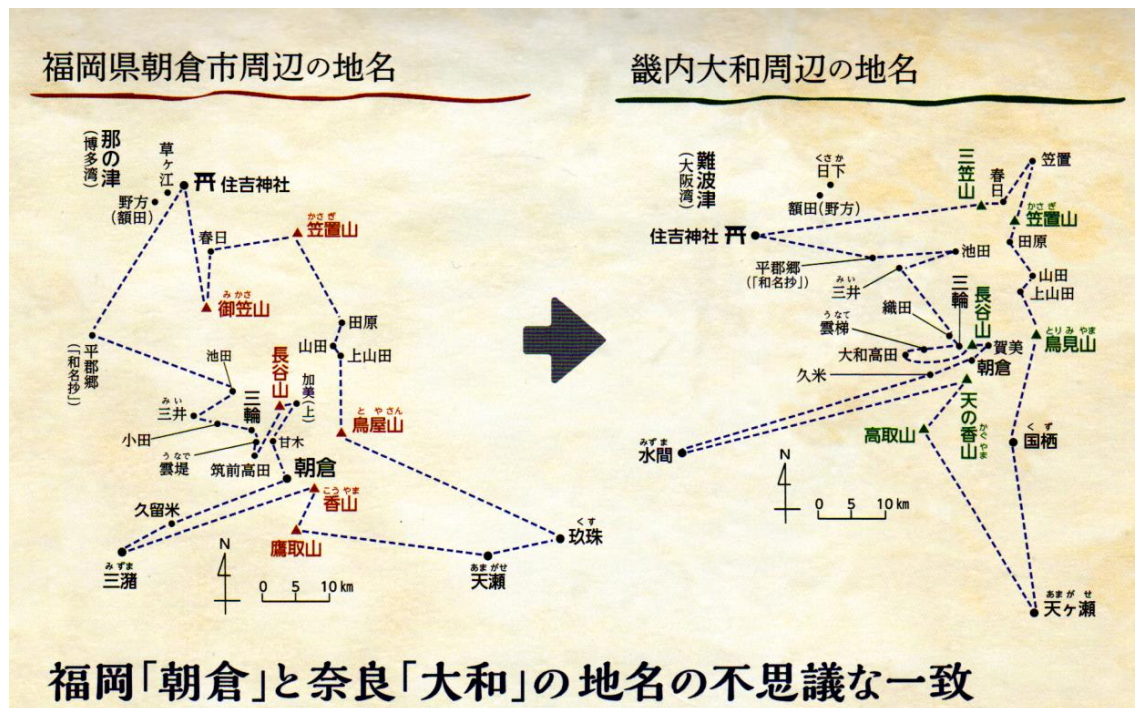


図 2 福岡・朝倉周辺と奈良・大和周辺の地名配置の対比（安本、2012、原図は、福岡市観光連盟作成のパンフレット「福岡古代ロマンの旅～邪馬台国時代編～ 邪馬台国は福岡にあった」）。

この場合、どちらがどちらを模したのか。洋の東西を問わず、何らかの事情で、ある人々のグループがある地を去り、新たな地に移住したような場合、似たような地名を付けることは枚挙に暇がない。わが国で言えば、明治以降、本州の各地から北海道に集団で移住した場合、元の地名あるいは元の地名を基にした地名を付ける場合が多い。外国の場合でも、大英帝国の人々がアメリカやニュージーランドに移住した場合、そのような例が多い。そして、多くの場合は、1つあるいは少数の地名が移される場合がほとんどである。

しかし、ここに示した福岡・朝倉の地名と奈良・大和の地名とにおける、これほど多数の、方位も含めた対応は驚くべき現象である。このような対比が可能であることは、単に、ある人々のグループが何らかの理由により移住したというだけでなく、もっと深い根源的な理由があるのではないか。それを考えさせる事項が記紀にみられる「邪馬台国東遷説」である。わが国の国土統一黎明期の歴史あるいは神話を記述した記紀には九州の勢力が近畿に移動し、出雲経由で、大和地方に入り、新しい勢力を形成し、やがて、その後の日本国家の歴史につながっていくことを示したことが記されている。



すなわち、福岡・朝倉と奈良・大和の地名の一致は、北部九州の勢力が奈良・大和に移動後、その記憶を残すために、出発地の地名を新たな土地に付けたのではなかろうか。もちろん、記紀に書かれていることは事実そのものを記したものではない。むしろ多くは、事実ではなく創作に属すると言った方がよい。しかし、神話の中に重要な史実の一部が反映されたと考えることは十分可能である。本論では、「邪馬台国東遷説」を一つの有力な仮説として、議論する。この仮説を受け入れられない有力な事実が明らかにされれば「邪馬台国東遷説」は捨てることになる。それが仮説というものである。

なお、九州北部の地名が元ではなく、奈良の地名が元であり、奈良の勢力が九州北部に移動したという仮説も成立しうる。しかし、この場合は、奈良に大和政権が成立した後、その勢力が九州北部に及ぶことによって、地名の移動が起こった可能性が考えられる。しかし、洋の東西を見渡して、人々の大移動に伴う地名の移動は、新天地に向かうという状況が圧倒的に多く、このような観点からは、奈良の勢力が九州北部に移動したため、第2図にみられるような地名の一致が見られる可能性は低い。また、記紀の記述からもそのようなことは想定されない。

## 2. 東遷の理由考

わが国の古代史において、弥生時代までは、日本の先進地域は九州北部地域にあり、古墳時代以降は、近畿地域にあったことはほぼ確かである。すなわち、弥生時代から古墳時代にかけて、日本の政治・文化の中心地域が移動した。弥生時代の九州北部の先進地域が何らかの理由で忽然と姿を消し、古墳時代の近畿地方は何らかの理由で忽然と先進地域として姿を現すように見える。

しかしながら、このような不連続が出現したことは非常に理解が難しいが、その1つの解決をもたらすものが、記紀に見える「東遷説」と言える。このように考える時、「東遷」の理由はいったい何であろうか。実は、これまでの研究からは、「東遷」の理由は十分解明されたとは言えない。たとえば、以下のようないくつかの記述が文献にみられる。

古事記に、「東に美し国あり。我いざこれを討たん」という表現があり、これをもとに東遷の物語が展開されている。しかし、「美し国があるから、討つ」という理由でははなはだ心もとない。あるいは次のような見解も見られる。「このように（戦争状態にある狗奴国と女王国とを一つにまとめて倭国にするというように）安定した倭国とするために、元の女王国の主力を東方の地であるヤマトへ遷すことが計画され実行されたのが九州北部勢力の東遷であった。」（森 浩一、2010）。しかし、この説も説得力が強いとは言えない。

一方、次のような見解もある。武帝の死後、晋朝は急速に弱体化し、それに伴って楽浪郡、帯方郡、朝鮮半島も乱れ始めた。291年以降は東夷の国々からの朝貢や内附もなくなった。大陸に近い九州北部にある倭国も常に緊張状態にあった。ヤマト国（邪馬台国）も西方の外敵から防御するため、その都をもっと安全な地に移す準備をしたと考えることができる。その地が大陸からもっと遠い東方の地で西方の外地からの防御に好適な大阪湾付近

を考えたのではないだろうか というものである（中村武彦、2013）。しかし、この説も説得力が強いとは言えない。

上述したように、従来から、いくつかの東遷の理由が挙げられているが、いずれも、根拠は薄弱である。政治的、経済的、あるいは社会的な理由ではないとしたら、他にどのような理由が考えられるか。そのような理由の 1 つとして考えられるものに、弥生時代末期の気候の寒冷化がある。実は数理考古学者の新井 宏氏が、炭素 14 年代法について考えるディスカッションの中で、次のように述べていることが紹介されている（安本、2014）。安本氏は、饒速日の命の東遷年代を、西暦 260 年～270 年前後、神武天皇の東遷年代を、280 年～290 年前後との自説を紹介した後、新井氏の意見を以下のように紹介している。「三世紀の後半に、大きな変化があったという見方は、考慮に値します。今日の炭素 14 の件でも、グラフが何回も出ておりましたけれど、西暦 260 年から 270 年のところにキューと下がって、そこから上がる場所があります（図 3）。もう定説と言って良いと思うんですが、炭素 14 の年代が下がるというのは寒冷期なんですね。ものすごく寒くなっている。いくつかの理由があります。炭素 14 ができる現象と、もう 1 つは海の流れの現象、いずれをとっても、そういう解釈というのは、非常にリーズナブルなんです」。さらに、続ける。「寒冷期って何が起こるかだいたいわかりますよね。世界中で争乱とか移動などの大きな変化が起きています。是非、この事をご参考にされたらよろしいんじゃないかと思います。」（情報考古学、Vol.19No.1-2、2013）。東遷の理由が「気候寒冷化」による可能性があるというのである。「東遷」の理由に関して、有力な政治的・経済的・社会的理由が見つからない現在、「寒冷化」という自然的理由も 1 つの選択（仮説）として考えても良いのではないか。

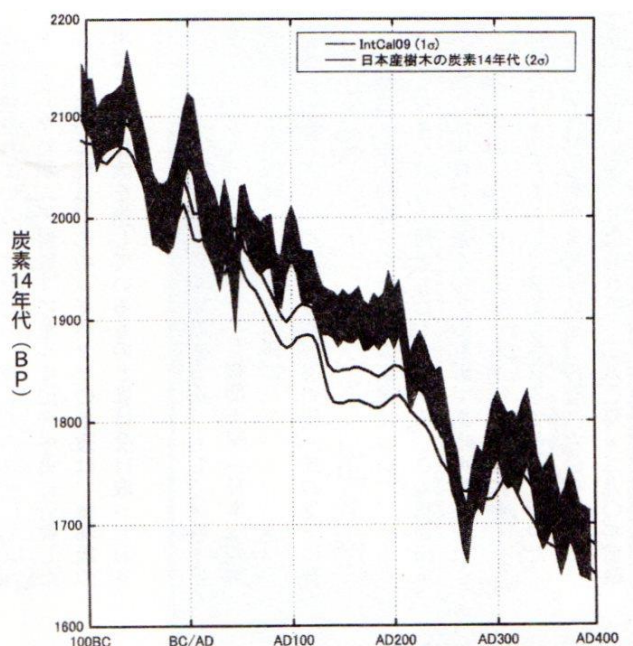


図 3 日本産樹木年齢の示す炭素 14 年代と IntCal109 との比較（国立歴史民俗博物館研究報告、第 163 集、2011 年 3 月刊。安本（2014）より転載。

### 3. 私（江原）の「東遷説に基づく邪馬台国 福岡・朝倉説」の提案

以下で述べる私の「東遷説に基づく邪馬台国 福岡・朝倉説」は、学問的な意味において、新たな学説を提案するという事ではない。むしろ、独学の結果から、今、どのような考え、いやむしろ、今、どのような思いにたどり着いているかを記すことと言ってよい。論文と言うより随想と言うべきかも知れない。ここにアマチュアとしての限界と楽しみがある。ただし、著者も、長年自然科学に携わり、多くの論文を書いてきた者であり、それを踏み外さないようにしたい。

出発点は魏志倭人伝である。繰り返し、魏志倭人伝を読む中で、自ら振り返り点をつけながら、魏志倭人伝の原文から、その意味を理解できるようになってきた。そして、従来にはない解釈もあり得るのではないかと思っている。

魏志倭人伝を繰り返し読むうちに、記述されている領域の距離感のようなものが感じられるようになり、ある時点から、邪馬台国に関して記述されていることが、とても近畿地方にまで及ぶような遠方のことではなく、九州北部地域に限られている感じが強くなった。

一方、従来の解釈において、方位あるいは距離の記述を簡単に変更し、自説を展開するやり方には強い違和感を覚えた。ある方位あるいはある距離の記述を誤りとする一方、他の方位あるいは他の距離を現代感覚で理解しているような記述に会うとこれまた違和感を覚えた。

科学の分野によっては、きわめて定量的に高精度の議論が可能な物理学のような分野もある。小生が専攻した地球物理学の分野でも、基本を物理学においているが、多様な面がある。たとえば、地球の引力である重力は相対誤差が  $10^{-9}$  程度の高精度（地球重力は  $10^3$  程度であるが、マイクロ ( $10^{-6}$ ) ガルの差を議論することもできる）の議論が可能な場合もあるが、ある長さに関する数値が、10mか、100mか、あるいは 1,000m程度であるというオーダーの議論しかできない場合もある。たとえば、地球外の遠方の観測者が、地球人の身長を何らかの方法で推定したとき、たとえば、「170. 2cm」というような健康診断で出されるような数値ではなく、また、「10cm でも 10mでもなく、1 mの程度である」というような場合である。すなわち、オーダーの話をしているのか、もっと細かい話をしているのか、時々疑問に思うような議論が古代史の話の中には出て来る。魏志倭人伝を読む時このような注意が必要と感じた。

さて、以上のような判断基準を持って魏志倭人伝を読む時、方位や距離を無理に変更することなく、邪馬台国は九州とくに九州北部に収まる。九州北部の中で、邪馬台国がどこに位置するかについては、人口規模からいえば、一定の面積が必要であり、有明海東岸から久留米市を通り、朝倉市方面に至る筑後平野がもっとも有望で、特に、福岡・朝倉周辺地域の地名群配置と奈良・大和地域周辺の地名群配置との不思議な一致をみると、朝倉地域は重要な候補となる。この地域周辺には、卑弥呼の墓に相当するような古墳はないと言われているが、この地域で発見された平塚川添遺跡の発掘も完全とは言えず、今後の新発

見の可能性がないとは言えない。なお、朝倉市山田の恵蘇八幡宮の御陵山（円墳）が卑弥呼の墓ではないかとの指摘がある（河村哲夫氏、私信）。卑弥呼の埋葬に当り、その棺は真っ赤な朱で満たされたのではないかとの推定もある（市毛、2016 の中に紹介されている、動物学者福岡伸一教授の指摘。なお、その後、著者らは、御陵山の水銀探査を実施したが、地表で楕円状（長径約 40m、短径約 20m）の高水銀濃度異常を検出した。この件は、別に詳細に報告したい）。また、卑弥呼の墓も直径百数 10m という大きな前方後円墳ではなく、直径数 10m 規模の円墳である可能性もある。恵蘇八幡宮の円墳はちょうどこの程度の規模である。

邪馬台国時代の遺跡・遺物、特に鉄器・絹などは、九州北部地方に圧倒的に多いが、近畿地方に見るべきものは少ない。弥生時代は、現在の朝倉市を中心とする九州北部地方が圧倒的に先進的であることは考古学的にほとんど確かである。一方、古墳時代以降、政治・文化の中心が、近畿地方に存在したことも万人が認める。弥生時代の政治・文化の中心が九州北部地方にあり、それに続く古墳時代の政治・文化の中心が近畿地方にあることの不連続性をいったいどのように理解すべきか。九州北部の政治と文化が忽然と衰退し、近畿の政治と文化が忽然と隆盛になる中で、日本（倭国）が継続性を持って発展したとはなかなか考えにくい。しかしながら、銅鏡等の墓への埋設物には、九州北部と近畿とでは連続性（九州北部からの風習の伝播）があると指摘されている（森、2010）。九州北部から近畿への見掛け上の不連続性の中で、連続性を示すものも見られ、特に、墓への埋設物という、本来、保守的な考えが反映されやすいものに連続性が見られることは重要なことではないか。

このわずかな連続性を文献的に反映しているのが、記紀にみられる、神武東遷説ではないだろうか。ただ、東遷説の最大の問題は、納得できる東遷の理由が見つからないことである。東遷説に関するいくつかの文献を注意深く読んだが、納得できるような合理的な理由が見つからない。政治的、経済的あるいは社会的な理由が見つからないとすれば、自然的原因も考慮することが考えられるが、想定しうる原因として、この時期に一致して想定されるものに気候の寒冷化がある。民族移動のようなものに寒冷化がきっかけになることは十分予想されるが、現状では積極的な理由に挙げられるまでには至らない。いずれにしても、東遷説は魅力的な仮説であるが、その理由を含め今後いつその検証が必要である。

以上をまとめてみると、魏志倭人伝の解釈、福岡・朝倉地域の地名群と奈良・大和地域の地名群との奇妙な一致、記紀には古代史の一定の反映があること等を考えると、「**東遷説に基づく邪馬台国 福岡・朝倉説**」は魅力ある仮説であるが、東遷の理由が見いだせないことから、まだ、積極的に提案するところまでは行かない。すなわち、仮説の段階である。今後は、ここに 1 つの焦点をあてて研究を進めたい。

## 参考文献

- 市毛 勲 (2016) 朱丹の世界、ニューサイエンス社、167p.
- 小山修三・杉藤重信 (1984) 縄文人口シミュレーション、国立民族学博物館研究報告、9 巻 1 号、1-39.
- 中村武彦 (2013) 邪馬台国の真相、東京図書出版、205p.
- 布目順郎 (1988) 絹の東伝、小学館、290p.
- 森 浩一 (2010) 倭人伝を読み直す、筑摩書房、217p.
- 安本美典 (2012) 古代史論争最前線、柏書房、230p.
- 安本美典 (2014) 邪馬台国は銅鐸王国へ東遷した一饒速日の命、北九州から畿内へ一、季刊邪馬台国、121 号、6-100.